



## 大切な宝物

院長 里見治美

私が、その当時桐朋学園大学の学長の井口基成先生に教えを乞うようになったのは、京都の華頂高校音楽科二年の秋でした。

親友の同級生が桐朋に行きたいと聞いて、私は担任のピアノの先生に桐朋を受けたいと言ったところ無理と一言。それを聞いた母はすぐに恩師の井口先生にお願いをしてくれたのです。(親友はその後芸大に合格。一緒になくてがっかり)

練習嫌いの私が猛練習を始めたのはそれからでした。基成先生はそのころオクターブがやっとの私に手が小さいとは一度もおっしゃらないどころか、それまでに弾いたことのないオクターブのバンバンでくる曲をさせてくださいました。入試の曲にもオクターブのエチュードを頂いたのです。五曲用意して当日一曲その場で割りばしのくじを引いて弾くのですが、もしそのオクターブの曲を引いていたらと後でぞっとしていました。

卒業後、一度だけレッスンをしていただいたペルルミュテールの下見のフランス人の先生が、「あなた、かわいい手ね。」その一言で初めて自分の手が小さいことに気が付きました。のちに両手にオクターブの重音が沢山でてきて弾くのは無理と思っていたシューマンの交響的練習曲も弾くことが出来ました。先生が出来るとあきらめないでくださったお陰だと感謝しています。

また、基成先生はこわいと評判でした。案の定、私も64分音符を思わず72分音符と答えて大きなグローブのような手でビンタをいただきました。

しかし、すごすごと帰ろうと玄関にいとドドッと奥から走り出てきて「がんばるんだぞ」と一言。そこに先生の暖かさを感じまた頑張るぞーと毎日七、八時間。エネルギーを頂いていました。周りの事は気にせずひたすら自分との戦いに明け暮れていた幸せな時間でした。先生が信じていてくださる事が、

また期待を掛けてくださることが元気の源になると感じています。

